

平成 22 年 12 月 20 日

## 電通、要支援・要介護者の食事や生活にかかわる実態調査を実施

－電通シニアプロジェクト 超高齢社会テーマ調査 第 2 弾－

株式会社電通では、日本が超高齢社会をむかえる中、介護をテーマに介護者本人への食事や生活に係わるニーズ調査を 2010 年 10 月に実施いたしました。

高齢化が進む日本社会の中、2055 年には日本人口の 4 人に 1 人が 75 歳以上になることが予想されています<sup>※1</sup>。要支援・要介護者数も増加を続けており、2007 年度末の要支援・要介護者は 437.8 万人。第 1 号被保険者<sup>※2</sup>の 15.9%を占めるに至っております<sup>※3</sup>。本調査は、そのような社会背景を前提に、要支援・要介護者（要介護 2<sup>※4</sup>まで）の方々を対象に、彼らの日常生活における食事や生活に係わるニーズ調査を行いました。これは、彼らの現在の食事や生活サービスの利用実態を把握し、現在の不満・不安から新たなニーズを導き出し、今後の介護領域の商品・サービス開発に寄与することを目的とするものです。

※1. 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来人口推計」（平成 18 年 12 月推計）出生中位・死亡中位仮定による推計結果

※2 介護保険の 65 歳以上の被保険者のこと

※3 厚生労働省「介護保険事業状況報告（年報）」

※4 立ち上りや歩行などが自力では困難。排泄・入浴などに一部または全介助が必要。

今回の調査は、電通シニアプロジェクトが、昨年 11 月に発表した「高齢化の親を持つ子ども（45～64 才）の親の高齢化・介護に関する意識調査」に続く、超高齢化社会テーマ調査の第 2 弾となるものです。

### 【調査結果の特徴】

- ・市販の高齢者向け食品の利用率は、2 割程度に留まる一方、栄養補助食品や機能性飲料は 5 割近い人が不規則ながらも利用。
- ・大人用オムツ（お出かけ用を含む）の利用率は 4 割程度まで広がっている。男性は「病気」など必要にせまられて。女性は「外出時」の安心材料としての利用も目立つ。
- ・新たな商品・サービスニーズ・ヒントは、「ころびやすい・つまづく」、「モノ忘れ」、「聴き取りにくい（聴力低下）」、「むせる・咳き込む」などの領域に。

### 【調査結果の詳細】

#### 毎日の食生活に関して

- ・毎日の食生活に関しては、介護度の低い方は、7割の方が自分で調理・購入をしているものの、介護レベルが進むにつれて割合は減少し、要介護度2では1割程度となる。
- ・独居（1人暮らし）では、「ヘルパーさんによる調理・購入」、「（弁当の宅配など）配食サービス利用」がそれぞれ3割を超える。
- ・毎日の食事で困っているのは、「いつも同じメニューになってしまう」、「出来合のものはおいしいものが少ない」ことなど。
- ・「（やわらか食など）市販の高齢者向けの食品利用」は、2割程度に留まる。一方、栄養補助飲料や機能性飲料は約半数近い人が、不定期ながら利用している。
- ・高齢者向け食品、飲料の購入のきっかけとしては、家族に次いで、ケアマネージャー、ヘルパー、栄養士の勧めが大きく寄与する。

#### 日常生活に関して

- ・要支援・要介護者が日頃していることとして上位に挙がるのは「テレビを見る」、「新聞を読む」など。介護度が高くなると「デイサービス」の利用が高くなる。
- ・「大人用オムツ（お出かけ用を含む）」の利用率は4割程度。男性は「病気」などに必要にせまられてだが、女性は「外出時」の安心材料としての利用も目立つ。
- ・現在、からだの症状で気になっていることで上位にあげられるのは「ころびやすい・つまづく」、「モノ忘れ」、「聴き取りにくい（聴力の低下）」、「むせる・咳き込む」など。全般的に男性よりも女性の方が、からだへの不安を幅広く抱える傾向にあり、とりわけ「骨粗鬆症」「モノ忘れ」に対する不安が高い傾向が伺える。

電通シニアプロジェクトでは、今後も超高齢社会ニッポンをテーマに、さまざまなマーケットニーズ開発調査を行っていく予定です。

#### ■調査概要■

調査方法：ケアマネージャーを通じた介護者本人への訪問アンケート調査

調査地域：全国

調査対象：要支援1から要介護2までの介護保険受給者 366 サンプル

調査日時：2010年9月14日～10月15日

調査会社：株式会社インターネットインフィニティ

〈本リリースに関するお問い合わせ先〉

株式会社 電通 プロジェクト・プロデュース局プロジェクト開発部

電通シニアプロジェクト

斉藤、明石、真鍋 03-6216-8048